

經典餘師

小學之部

四

口 11

1029

14

口 11
號 1029
卷 14

小學卷之七

董仲舒曰

正其利而不計其功
明其功而不計其利

小學卷之七

董仲舒曰仁人者正其誼不謀其利

明其道不計其功漢の代の太儒董仲舒の語なり仁人とは本心の徳の全完人といふなり今日君への官役家の

の徳の全完人といふなり今日君への官役家の
いふ義理にふみひらるゝに勤て怠惰なれば十
九の交際の道又ハ常に心を置く利欲心
にあづかり引とるるに時身は正して身の舉動
は義理にふみひらるゝ利欲心の謀るるに明ら
ふ道とありておとるゝの報する功とはや得
たりや心に計しつゝ事
仁人のいふひらるゝなり

孫思邈曰膽欲大而心欲小智欲

圓而行欲方孫子邈ハ唐の代の太醫なり
人のこゝろの太切といふ心ハ

孫思邈曰
膽欲大
心欲小
智欲圓
行欲方

孫思邈曰

孫思邈曰

一

欲而而行
へがまを欲す

くふ小るべし人膽へたふらん大うべし、智へ圓く、
行へ方とたふらんむざり人子細へ心へ慎戒ふらんべし、
又義理にのまて大膽にせん遂かこへべし、智へ
圓くふらんや、萬事にゆるゆるるべし、行へ方
ありてたふらんべし、

古語に云く善
に従へん登る
如く惡に従へ
崩る如し

○古語云從善如登從惡如崩
て曰く善く人にあひて從順へ高山に登る
致るる如く惡く人にあひて崩るる如し
なり、考索べし、

孝友先生朱
仁軌隱居
親と養へ嘗
て子弟に誨
て終身路と
譲るる百歩と

○孝友先生朱仁軌隱居養親嘗誨
子弟曰終身讓路不枉百步終身讓
畔不失一段
唐の代に孝友先生の名
と仁軌といふ人の語あり、

枉不終身畔
と譲るる一段
と失ふ

すべて人々耻とさるる義理とさるるものあり、
人々道に譲るる終身の内に百歩と枉ふること
蹴るる如く又た人々田地と作り塚目と
間へ一段と失はるる如く、此の損亡の
多しとさるる心に計てせんべきあり、

濂溪周先生曰
聖希天
賢希聖
士希賢
伊尹顔
淵大賢也
伊
尹其君亮
爲不夫也
其所不得
顔淵之怒
遷

○濂溪周先生曰聖希天賢希聖士
希賢伊尹顔淵大賢也伊尹耻其君
不爲堯舜一夫不得其所若撻於市
顔淵不遷怒不貳過三月不違仁
先生は程子の師なり、聖人の天地の徳にひかへ
賢者は聖人の徳をこゝろみ、

伊尹之志いゐん之所いにし心こころにこころ顔淵げんえん

の學所まなぶところに學まなぶが
 過すかてすはす則すなはちち聖せい王おう及およ
 ばす則すなはちち賢けん及およばす不ふ
 則すなはちち亦また令しづ名なと
 失うふす不ふ聖せい人じん之の
 道みち車くるまにこ入いてこ心こころに
 存ぞんずす之のとと蘊つみバ
 德とく行ぎやうとと為なすす之のと

行ハ事業と爲
彼文辭已と以
てする者ハ陋
於乎而矣助字也

仲由過ちを聞
て喜んで令名
窮り無_{きま}今の人
過ち有_{あれ}人の規
と喜ぶ不_ず疾と
護て而_{まう}て醫と
思心_{しん}が如_{ごと}し。寧_{ちやう}其六
身と滅_{めつ}して而_{まう}
て悟_{さと}く無_な噫_あ

明道先生曰
く。聖賢の

經史余而

尹之所志學。顏淵之所學。過則聖。及
則賢。不及則亦不失於令名。聖人之
道入乎耳。存乎心。蘊之爲德行。行之
爲事業。彼以文辭而已者。陋矣。

一賢人と心に分るゝ萬一過れば聖くなり及ぶ賢
とより不及りとも令名をばうゝまふべ聖人の道
といふ蘊へもどてずば、行に徳の光ありて施して事の
業あり學問とがて文辭のふみこになり、才とよりふ
陋き學問と
より

○仲山喜聞過令名無窮焉今人有
過不喜人規如護疾而忌醫寧滅其
身而無悟也噫聖人の御門人こそ仲由
出ふちを喜よろこ悅び人ひとがより依よてその令名けいめい今いまにつとへて窮きまり
かゝる人ひとより規をすのあれはかくも秘ひとむこそなり、
たゞくは疾やまひおりかゞく、醫師いしとたゞ人に
のおとく、滅めせしうんを悟さとめぬといふのと

○明道先生曰聖賢千言萬語只是

欲人將已放之心約之使反復入身
來 聖人賢者ひうういふくく 教訓と誓と
人々の心とより約さるなり人の心ハ義理と
ひういふくく愈々情より流さるゝ候て極々に道引
とさるゝひて放さるゝ心と、自能尋向上去
人の身に納入せしかり、
下學而上達也心要在腔子裏
人の心は腔子と云ふ道と盡したるは夫より天理の高
に極まり是と下とを學て上へ通達するは是なり
先身の行事とはさるゝて深切なり夫より智
の場へいより廣くさるゝ下より上にひるまふと
は是なりたゞ肝要は人の心腔子裏にさうく存して
あると云夫とさるゝ忠信の重し心の主とく
うういふくく放
ふれざるべし

○伊川先生曰。只整齊嚴肅。則心便

○伊川先生甚愛表記君子莊敬曰

蓋常人之情纔放肆則日就曠蕩自

規矩に就す

人於外物奉ほう身しん

事好ことこのむと要えすこと

者事事要好ものごとこのむ只有自家一箇身與心ただ自家一箇身と心

自家一箇の身自家一箇の身

却不要好却不要好苟得外物好苟得外物好時却不知道時却不知道

心與有心と有却却

自家身與心已自先不好了也自家身と心已自先不好了也

苟外物好苟外物好時却時却知道知道

不自家の身不自家の身心與心と已已自自先先不好不好了也了也

先好先好不不了也了也

伊川先生曰伊川先生曰顏淵問克已復禮之顏淵問克已復禮之

問孔子の日問孔子の日

勿言非禮勿動勿言非禮勿動

禮に非禮に非視視

伊川先生曰伊川先生曰顏淵問克已復禮之顏淵問克已復禮之

問孔子の日問孔子の日

曰孔子曰非禮勿視非禮勿聽非禮曰孔子曰非禮勿視非禮勿聽非禮

勿言非禮勿動勿言非禮勿動

四者身之用也四者身之用也由乎中而應由乎中而應

四の者四の者身身之之用用也也

乎外制乎外乎外制乎外所以養其中也所以養其中也顏淵事顏淵事

中と養中と養所以也所以也

斯語所以進於聖人後之學聖人者斯語所以進於聖人後之學聖人者

顏淵斯語と事顏淵斯語と事

宜服膺而勿失也宜服膺而勿失也

以以中中之之事事

四者身之用也四者身之用也由乎中而應由乎中而應

四の者四の者身身之之用用也也

乎外制乎外乎外制乎外所以養其中也所以養其中也顏淵事顏淵事

中と養中と養所以也所以也

斯語所以進於聖人後之學聖人者斯語所以進於聖人後之學聖人者

顏淵斯語と事顏淵斯語と事

宜服膺而勿失也宜服膺而勿失也

以以中中之之事事

四者身之用也四者身之用也由乎中而應由乎中而應

四の者四の者身身之之用用也也

乎外制乎外乎外制乎外所以養其中也所以養其中也顏淵事顏淵事

中と養中と養所以也所以也

斯語所以進於聖人後之學聖人者斯語所以進於聖人後之學聖人者

顏淵斯語と事顏淵斯語と事

宜服膺而勿失也宜服膺而勿失也

聖人せいじんを學まなぶ者もの。
宜よろく服膺ふくようして
而しかく失うしなはく勿な。
宜よろ也。
宜よろ渡わた于を於こゝ。

因て箴に以て自警む。其視箴に曰く。心の本虚く。物に應じて迹無之と。操に要有視之之則と爲前に藏交われ。其中則遷之と。米に制て以て其内と安んず。己に於て禮に復れ。今於矣。

中ちゆうにやまへへに由よて外がのまゝに應おほて外が
 するとまゝ正ただに制さく入いりつたり、顔えん子しの語ご
 常つねに事こととしておもしろむものいふ、聖せい人じんといふ
 たりといふなり、人々大だい切きつに腐くさに服ふくてうゝまづるべし

因箴以自警。其視箴曰。心兮本虛應。

物無迹操之有要視爲之則蔽交於

前其中則遷制之於外以安其內克

己復禮久而誠矣の因て程子工夫あり非禮の儀を視るとさく儀

つるふもさうして踊うとさういふまり、たうの音楽の
たうと場所入の武術の勇々しく場所その
應品々にうろたひすべでさうう、さういふその場と
並のけはさうと心うとゆりえんさういふ中う

藏かくれてゐるやうな心とつゝ
依よつて心こころを操さりつゝに肝かん要ようありとの
視みえゝふ。非禮

と、まづて準法とて、心の欲を外に制し、
心と内に安てくさうきに工夫とせしむ。

其聽箴曰。人有秉彜。本乎

天性知誘物化遂亡其正卓彼先覺

知止有定。閑邪存誠。非禮勿聽。

一尋の心い悪くすく筆くく兼きりくく人天
性くすくの性賀あるがりふれども知くくどあふ長ド

耳に聴にちて物に誘引心これに變化して遂
に正きと失にちるなり、慨て草ふつちうの

先覺の人々も中正場所に止まりての心の定まるるをもつゝのとめたるまゝゝとふうう邪曲（よこしま）と聞きこて誠（まこと）と存（ぞん）ずるのとめたるまゝゝとふうう

其言箴曰人心動因言

言に因て以て
宜發に躁妄と
禁ずれば其斯に
靜專なり然則
樞機めて我と
興一好と出
吉凶榮辱惟
其召所易に
傷ハ則誠煩
傷と人則支
已肆さかれ
物忤ひ出
悖れ來と違
法に非れ道
不欽哉訓辭
其動箴に曰
哲人ハ機と知
て之と思に

以宜發禁躁妄內斯靜專矧是樞機
興我出好吉凶榮辱惟其所召傷易
則誕傷煩則支已肆物忤出悖來違
非法不道欽哉訓辭人の心の動ハ言に
とめて心と安靜と誠に善惡の樞機なり
四も榮辱も辱も終ハ言に易言とて
誠にかり煩言とて支已肆物忤出悖來違
ずるものなり
其動箴曰
哲人知幾誠之於思志士勵行守之
於爲順理則裕從欲惟危造次克念
戰兢自持習與性成聖賢同歸

誠に志士
行を勵
之と爲に守
理に順則
裕から欲
惟危一造次
克念戰兢
自持習與
性成聖賢
同歸

於爲順理則裕從欲惟危造次克念
戰兢自持習與性成聖賢同歸
知て誠に思慮とてふかきつるに
士ハ勵行邁とて義理と守りて
造次とて戰兢とて
性質のうちに在りて聖賢
歸趣とせしむるなり

伊川先生言
人三不幸有
少年みて高
科に登一の
幸なり父兄
之勢に席し

○伊川先生言人有三不幸少年登
高科一不幸席父兄之勢爲美官
不幸有高才能文章三不幸也

と患ふ也
呂榮公嘗言
後生の初學
且須く氣象
と理會する
氣象好時百
事是當氣象
者辭令容止
輕重疾徐以
て之と見ふ
足り惟君子
小人此に於て
必にあり不亦
貴賤壽夭之
由て定まる所也
須に度(笑)焉

○呂榮公嘗言後生初學且須理會
氣象氣象好時百事是當氣象者辭
令容止輕重疾徐足以見之矣不惟
君子小人於此焉分亦貴賤壽夭之
所由定也
呂榮公の末の名たる臣なり學者
夫そんべとあり氣象のさうさうされば百事の
道理に當べしとの氣象の工夫の場とす
辭令容止の輕重と事の徐疾なりいふ
つべし君子小人と貴と賤と壽命と夭死と
いづるべしとあり中より蕪子のとと人々大
死つれども天命のみに多右の理とすれはさう
生質の宜き人々氣象の
いづる人々あり

其惡を攻て
人之惡を攻
と無蓋自其
惡を攻て日
夜且自點檢
絲毫も盡
不ば則心に
歉なり豈工
夫他人を點
檢する有ん
耶(笑)
大要前輩事
と作と多ハ
周詳なり後
輩事と作と
多ハ闕畧なり
恩讎分明此
四字有道者

攻其惡無攻人之惡蓋自攻其惡日
夜且自點檢絲毫不盡則歉於心矣
豈有工夫點檢他人耶
己の惡を攻て
ととむべし己と攻むるの法日夜に點檢と
して絲毫のさうさう窮盡とすれは心小歉なり
いづる人々他人の
工夫する間もあるゆゑなり
○大要前輩作事多周詳後輩作事
多闕畧
大要氣とつとてみる前輩の輩の事
に周て一つふ詳悉ふいふなり後
世の輩の作とすて畧義
道理に於闕てしと見ゆ
○恩讎分明此四字非有道者之言

之言人非也
也好人無之
三字有德者
之言非也
也後生之戒

張思叔座右銘曰
凡語必忠信
凡行必篤篤
敬必慎節
字畫必楷正
容貌必端莊
衣冠必肅整
步履必安
詳必出言必
謀始

居處必正
靜必事
必出言必
謀始
行必謹
常德必固
持然諾
必重應見善
見惡如己
病凡此
十四者我
皆未深省
此當座隅
朝夕視爲
警

也無好人三字非有德者之言也後

生戒之

世のついでに思ふ人ふきつと思ふ
以て報へる人ふきつと思ふ
道有人の言ふに思ふ人ふきつと思ふ
報へる人ふきつと思ふ
以て相授へる人ふきつと思ふ
又人の詞に
凡て世の中は表面はよく内心はよく
無と云ふありありと徳と有る人の言に
たゞて已が身實に正しき人なる正さ
にあり己が心實に善き人なる善き
すや、後世ふく我らに

○張思叔座右銘曰凡語必忠信凡

行必篤敬飲食必慎節字畫必楷正

容貌必端莊衣冠必肅整步履必安

詳居處必正靜作事必謀始出言必

顧行常德必固持然諾必重應見善

如己出見惡如己病凡此十四者我

皆未深省書此當座隅朝夕視爲警

張思叔の程子の門人なり、常に座の右に懸
と記て戒めとせり、その條といふ、言ふ
忠やうやうに行ひ篤敬なり、飲食の節と慎み下
字畫楷正なり、容貌の端莊なり、衣
冠の肅整なり、步履の安詳なり、居處の正靜なり、
作事の始に謀らんや、言と行とを顧みず、
常に徳を修めんとす、然諾を思ふ、慮して
重く、應じ人の善を見て己を愧む、人の

胡文定公曰

一切の世味淡

好須富貴の

相有るを要

孟子謂堂高

數仞食前

方丈侍妾數

百人我志

得也為不學

者須先此

等と除去く

胡文定公曰人須是一切世味淡

薄方好不要有富貴相

孟子謂堂高數仞

食前方丈侍妾數百人我得志不為

學者須先除去此等常自激昂便不

到得墜墮

孟子謂堂高數仞食前

方丈侍妾數百人我得志不為

學者須先除去此等常自激昂便不

到得墜墮

孟子謂堂高數仞食前

志をこころに病むと云ふは、右の條に云ふ

良をかくし飲食の腹にうづめ、好くつゝあつた

たし、榮耀あるの相

孟子謂堂高數仞

食前方丈侍妾數百人我得志不為

學者須先除去此等常自激昂便不

到得墜墮

孟子謂堂高數仞食前

方丈侍妾數百人我得志不為

學者須先除去此等常自激昂便不

到得墜墮

常に愛す諸

葛孔明漢の

末に當て躬

南陽に耕聞

達と求不後

來劉先主之

聘に應せ山

河を宰割

天下と三分

身將相と

都手に重兵

何欲不遂乃與後主言成都有桑八

百株薄田十五頃子孫衣食自有餘

饒臣身在外別無調度不別治生以

長尺寸若死之日不使廩有餘粟庫

經典餘師

卷之七

十

胡文定公曰

一切の世味淡

好須富貴の

相有るを要

項有子孫の衣
食自餘饒
有臣身外に在
て別に調度無
別に生と云て
以て尺寸を長
不死する大の
石の庫に餘粟
有庫に餘財有
使て以て陛下に
負不卒に及て
果て其言如
此の如輩の人
真に大丈夫と謂
つ可矣

范益謙の座
右の戒に曰く
一朝廷の

利害邊報の
差除と云言不
二州縣の
官負の長短
得失と云言不
三衆人の
作所の過惡と
言不四富
職に仕進する
に時に趨勢に
附と云言不
五財利の
多寡を求と云
言不六淫媒
戲慢と云言不
七人の物
評論する言不

有餘財以負陛下乃卒果如其言如
此輩人真可謂大丈夫矣
孔明諸葛公
南陽といふ
所にたぐい後劉皇叔の聘に應て天下を
宰割て軍兵を握司將相職ありあり心
に欲求する遂得ざるもいふもいふも
天子につぶのあふ成都の郡に桑の木八百株
あり又薄田十五頃あり子孫のくく饒なり
臣の外に出るもいふられ別にいふもいふも
く尺寸も入用なり死するも死するも
くくの粟財ありあふる子孫に不足と云
た陛下に負するのやういふもいふも
孔明の語のぶくかり真に大丈夫といふ
べし語るこの事を愛
とるぞと伊川先生のあつ

○范益謙座右戒曰一不言朝廷利
害邊報差除二不言州縣官負長短
得失三不言衆人所作過惡四不言
仕進官職趨時附勢五不言財利多
少厭貧求富六不言淫媒戲慢評論
女色七不言求覓人物干索酒食
范益謙
謙といふ人
此言ハ口外へ
出さず慎言
さるべし一
國家の政
善惡をいふ
はの利害君
の朝廷にあ
つる事なり
二州縣の官
負の長短得
失の事なり
三衆人の作
所の過惡を
いふ事なり
四富職に仕
進するに時
に趨勢に附
する事なり
五財利の多
寡を求むる
事なり六淫
媒戲慢は人
の物を評論
する事なり
七人の物を
評論する事
なり

と求覓し酒
食と于索する
とを言不
又曰く一書
信と附て開折
沉滞不可不
二一人與人並
坐て人の私書
と窺ふ可う不
三一人凡人の家
に入て人の文章
と看可う不四
凡人の物を借
損壞し還不
ある可う不五
凡飲食と喫て
棟擇去取す可
く不六

の物とてふつけその品と覓求又ハ食物の又
品とて索する瘠あれるのたぐひ言さるるにぞ
曰一人附書信不可開折沉滞一與
人並坐不可窺人私書三凡入人家
不可看人文字四凡借人物不可損
壞不還五凡喫飲食不可棟擇去取
六與人同處不可自擇便利七見人
富貴不可嘆羨詆毀凡此數事有犯
之者足以見用意之不肖於存心脩
身大有所害因書以自警又ハこの條々

與同く處自便
利と擇可う不七
一人の富貴を
見て嘆羨詆毀
す可う不八凡此
數事之と犯者
有らば以て用意
不肖と見に足
心と存身と脩
に於大に害する
所有因て書て
以て自警言

人の書信と附註て沉滞り又ハ折開するまじき
サリ、二一人人の私書とてうろつきまじきサリ、三一人
の物とてふつけ人の文字なりても見まじ、四一人借
りて損壞するまじ、五一人他家より喫物をとれ
るれ可う棟擇より否にまじ、六一人
同席してそれの便利とられむと、七一人の
富貴と羨み又ハ詆毀する右の条々慎みなく、犯者
はそれとて用意の不肖があらうの身脩に
害あり候てみづる
敬言むるもれやうとぞ

胡子の曰。今之
儒者文藝と學び
仕進と干す之心
と移て以て其放
心と收て而て其
身と美てハ則何

○胡子曰。今之儒者移學文藝于仕
進之心以收其放心而美其身則何
古人之不可及哉。父兄以文藝令其
子弟朋友以仕進相招往而不返則

古人之及可謂不
 哉兄文藝以
 其子弟令
 朋友仕進
 相招往而
 返不則心始
 荒而治
 不萬事之成
 咸古先不逮不
 矣

顏氏家訓に曰く
 夫讀書學問
 所謂本心を開
 目を明ふ行に
 利ありと欲する
 未親と意を承
 意に先承て顔
 聲と下

勉勞と憚不し
 以て甘腴を致し
 惕然惕然
 起て之を行ふ
 欲也
 未君に事
 知未都其古
 人之職と守
 畏無
 見て命を授け
 誠諫と忘心
 以社稷と利
 觀て惻然
 自念思
 て之に効んと
 素より驕奢
 者其古人之

経典余

心始荒而不治萬事之成咸不逮古

先矣當今の學者文藝と以て仕進と干る

藝の不放たんと人にも及べし父兄も大
 友もたぐひに仕進のさうざんといふありて招あへの
 りめく身に不返す後々心も荒れて萬事
 古先の人々に

○顏氏家訓曰夫所以讀書學問本

欲開心明目利於行耳讀書學問といふ

欲開心明目利於行耳讀書學問といふ

養親者欲其觀古人之先意承顏怡

聲下氣不憚劬勞以致甘腴惕然惕

然慚懼起而行之也親につくるは古人

然慚懼起而行之也親につくるは古人

未知事君者欲其觀古人之

守職無侵見危授命不忘誠諫以利

社稷惻然自念思欲効之也君につくるは古人

社稷惻然自念思欲効之也君につくるは古人

素驕奢者欲其觀古

人之恭儉節用卑以自牧禮為教本

経典余

恭儉きんけんして用もちと

節しやく少すく卑ひんで

自みづか牧かし禮れいの教けう

の本ほん為ため敬けい者しや身み

の基もとを敬けいと觀かんて

聖せい然ぜんと自みづか失しし

容ようと歛れん志しと

抑おさんと欲ほつ也なり

素そ鄙ひ悋りん者しや欲ほつ其その

觀かん古こ人にん之の貴き義ぎ輕けい財さい

少すく私し寡くわ慾よく忌き盈えい

惡あく滿まん賙た窮きゆう恤しつ匱けい然ぜん悔かい耻し積しやく而して能なり散さん

齒し敝へい舌ぜつ存ぞん含くわん垢かう藏ざう疾じやく尊そん賢けん容よう衆しゆ茶ち然ぜん

素そ暴ぼう悍はん者しや欲ほつ其その觀かん古こ人にん之の小せう心しん黜てつ已い

沮そ喪さう若じやく不ふ勝しやう衣い也なり

欲ほつ其その觀かん古こ人にん之の達たつ生しやう委い命めい強きやう毅ぎ正せい直ちく

立たつ言ごん必ひつ信しん求きう福ふく不ふ回かい勃はく然ぜん奮ふん厲れい不ふ可か

恐おそ懼く也なり

歷れき茲し以もつ往かう百ひやく行かう皆みな然ぜん

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

敬者身基瞿然自失歛容抑志也驕奢

淳と去甚と能く
泰と去甚と
去之と學で知
所施で達不
とや無世人
書と讀で但能
之と言ふ之と
行と能不武
人俗吏共に
嗤詆せ所
良に是に由耳
又數十卷の
書と讀で便
自高大少長
者と凌忽心
同列と輕慢
有人之と疾と
讎敵の如之と

縱不能淳去泰去甚學之所知施無
不達世人讀書但能言之不能行之
武人俗吏所共嗤詆良由是耳
百行といふも泰甚といふも所とすて學といふも施
淳一やうばくも泰甚といふも所とすて學といふも施
いかにいふとやうと書といふも言ふと行ふ
いかにいふとやうと書といふも言ふと行ふ
良に右の性質の
いやに由る
又有讀數十卷書便自
高大凌忽長者輕慢同列人疾之如
讎敵惡之如鴟梟如此以學求益今
反自損不如無學也
數十の書といふも心の
高大なりて長者

惡く鴟梟の
如此の如く學
と以て益と求
て今反て自損
學無に如く也
伊川先生曰
大學孔氏之
遺書初學
德に入る門也
今に於古人學
と為次第と見
可者獨此篇
之存するに賴
而て其他則
未論孟子如
有未故學
者必ず是に由
而て學す則ち

○伊川先生曰大學孔氏之遺書而
初學入德之門也於今可見古人爲
學次第者獨賴此篇之存而其他則
未有如論孟者故學者必由是而學
焉則庶乎其不差矣
大學の書に孔氏
の家に遺るもの
て初學の德に入づる門なり今の世
に居て古への學問のいかに於の次第見よの
此篇の存に賴てなり他の論孟孟子
の之に次ぐ書なり學者是書に由て學ま

其差不に度
未に渡馬平矣

凡語孟子と看
且須熟讀

玩味て聖人
之言語と將て

此に切に
一場の語説と

作可此二書と
看得て此に切

論語と讀
弟子の問

處と將て便
已る問と作聖

人の答處と
將て便る今日

の耳聞と作
自然に得る

有若能論孟子
中に於深求て

玩味せし將來
涵養し成て其

と氣質と生
根渠先生曰

中庸文字輩
直に須る句句

其言とて互
に相發明せ

使須る句句
六經ハ須る循

環て理會す
須窮無盡自

家一格と長得
經典餘帛

經典餘帛

聖人の道に差
するべしと

○凡看語孟子且須熟讀玩味將聖人

之言語切已不可只作一場話説看

得此二書切已終身儘多也

の法ハ一なりか熟と讀玩味てつゝ聖人の言

語と一々已る身に引くや深切にふるべし一場

○讀論語者但將弟子問處便作已

問將聖人答處便作今日耳聞自然

有得若能於論語中深求玩味將來

涵養成其生氣質

答と便に己身と聖人へたづめらるゝに

いふ又聖人の御答とらるゝに耳聞とて

いふ又自然と得道とてふべし自然に

涵養成其生氣質の

妙と得べし

○横渠先生曰中庸文字輩直須句

句理會過使其言互相發明

○六經須循環理會儘無窮待自家

一 口 舎 人 の 日

一行一住一語一默

一、一日
二、一日

の經書一般の
子書とは讀須

と要人須二度々
類く静室に

句く須す字じ字じ句く
く明めい字じ字じ句く
く明めい字じ字じ句く

授と連て通讀
すゝと五七十遍

史書の毎日須

經良余而

今^{イマ}の五^ゴ經^{キョウ}に樂^{ガク}
とて六^{ロク}經^{キョウ}と

道理あり

會所以爲學者何事
行住語

立課程不可一日放慢每日須讀

熟じやく品しん舎や人ひとくくるる人ひとの語ご後のち學がく生せいくくるる
くくぎぎハ先さきの學がく問もんと為なゆへんの事ことハ如ごとく

課程くわていとて一日いちにちも放慢はうまんなすべからず一日いちにちに一般いぱんの聖人せいじんの經書きやうしよと賢者けんしや達たちの子書しよと

坐讀取二遍字字句句須要分明

通須令成誦不可一字放過也史書

功を讀よべし、さうそくそ二に三さん四し五ご日にちのの間かん師しににままううろろし

所^{ところ}と毎日連^{つづいて}て五六十遍^{ごじゅうへん}とて、一
字一句も分明^{ぶんめい}なして後々^{おのち}に誦^{よみ}べしうき大
半^{はん}卷^{けん}も放適^{ほうたつ}なればなり、代^{かゝり}々の史書^{ししょ}などは一巻
須^す是從人授讀^{じゆく}疑難處便質問求古
聖賢用心竭力從之^{じんぎやうしんこくつきより}
人に授讀し中に疑難場所なきこと質問
て力を竭^{つくしむ}く聖賢の心と用^{もち}ふべし、所^{ところ}をわがて求
夫指引者師之功也行有不至從容
規戒者朋友之任也決意而往則須
用亡力難仰他人矣^{あらず}
指引は師の功なり、行ふの不至を

ありて、他人に
仰のぞふなむとあり

○呂氏童蒙訓曰今日記一事明日
記一事久則自然貫穿今日辨一理
明日辨一理久則自然浹洽今日行
一難事明日行一難事久自然堅固
渙然水釋怡然理順久自得之非偶然
也
明日たゞ一今日段々しづかつて久ひさくく自然じぜんにいく
理りと貫くわん穿せん手てに入いり今日こんにち一つひとつの理りと辨べん明めい
難なん行ぎやうといくく一つひとつくく行ぎやうふふくくののくくああややくく

前輩嘗說後生才性人
過者者畏人
足不惟書と讀

順に怡然しく手に得るのかり、惣體うんんかる
もの、偶然に手に入
やうに思ひあふりなり

○前輩嘗說後生才性過人者不足

畏惟讀書尋思推究者爲可畏耳又

云讀書只怕尋思蓋義理精深惟尋

思用意爲可以得之鹵莽厭煩者次

無有成之理

顏氏家訓曰
借人典籍須先

人に過るるを畏ふたふ、惟畏ぶるの書と讀
て推究尋思のふるれかりらるやうに勝るの
これぐくむる也、義理の精深所の意を用ゐる
ふくして尋思のふるれかりらるやうに勝るの

愛護す須先
に缺壞有る

鹵莽なりつるれ人ハ、精深く尋思する
と煩雜く、うんんにかりて決して大徳
成就のあふり

○顏氏家訓曰借人典籍皆須愛護

先有缺壞就爲補治此亦士大夫白

行之一也濟陽江祿讀書未竟雖有

急速必待卷束整齊然後得起故無

損敗人不厭其求假焉或有狼藉几

案分散部秩多爲童幼婢妾所點汚

風雨蟲鼠所毀傷實爲累德吾每讀

の爲に點汚せ
所風雨蟲鼠
に毀傷せ所
實に徳と累
すことと爲五
聖人の書と讀
毎に未嘗て肅
敬せ之に對せ
不ふ未其故
我及聖賢の詞
義五經の詞
義及聖賢の
他に用不也
未讀

聖人書未嘗不肅敬對之其故紙有
顏公の傳に人の典籍と借て愛護に
缺壞し補治とせんべしあれ又
士大夫の身し百の行のふりなり近頃
に江祿とて濟陽の人なり書と讀かり
て速用しとて整齊に束てみり
に坐と起し損敗とてしりり
依て人し求假しとて厭にみり
て凡案の上に部秩分散狼籍やりにて童
幼又ハ婢妾のふれに點汚し又ハ雨
うせす鼠のふりみ毀傷られ人徳と累
ふふい吾れ聖人の書とてしりり
肅敬とく故紙のうりみ五經の詞義の
向ふ姓名あれ他の用

明道先生曰
君子の人と
教ふ順序有
先傳に小者
近者と以後
大と以後大
非也

明道先生曰
道之明生曰
ハ其端之と害
也昔之害
近而知易今
之害深而難

○明道先生曰君子教人有序先傳
以小者近者而後教以大者遠者非
是先傳以近小而後不教以遠大也
君子の人と教ふ順序有先傳に小者
近者と以後大と以後大とつて
明上達につるべし

也昔之害近而易知今之害深而難
辨昔之惑人也乘其迷暗今之入人
也因其高明自謂之窮神知化而不

足以開物成務。言爲無不周徧實則
外於倫理窮深極微而不可以入堯
舜之道天下之學非淺陋固滯則必
入於此自道之不明也邪誕妖妄之
說競起塗生民之耳目溺天下於汚
濁雖高才明智膠於見聞醉生夢死
不自覺也是皆正路之蓁蕪聖門之
蔽塞闢之而後可以入道

可也也也於於於
 後以て道に入
 門之蔽塞之
 路之秦蕪聖
 不也是告正
 生歟死自覺
 見聞に膠酔
 智と雖
 濁に溺す高
 塗天下と汚
 取之甲日と
 詭競起て生
 邪誕妖妄之
 明るる不助
 此に入道之
 に非れん則必

世の老莊佛者の害への理を高明くして害
 の用政務に不足なり又何事と功德周
 徧するを言ふと實に人の倫の外にのこ
 るるやうなことも聖人堯舜の道に不
 入ることも多し固滞り多しものに
 妖妄なる教に邪誕しその詭競起て人
 の耳目と汚濁をつまみ夢膠かきま
 ず人の子路も秦蕪蔽塞て覺る事な
 りこの所と見聞する眞の道德とすべし

右廣敬身

右廣敬身

糸典食前
右敬身と廣

小學卷之七終

讀法

小學卷之八
善行第六

呂榮公名希哲字原明申國正獻公之長子。正獻公居家簡重寡默。不以心經事物。而申國夫人性嚴。有法度。有甚公。愛之。雖然。公教我。事事規矩。循蹈。甫十歲。祁寒。

小學卷之七終

小學卷之八

善行第六

古人の行狀の善すべしと記す

呂榮公名希哲字原明。申國正獻公之長子。正獻公居家簡重寡默。不以事物經心。而申國夫人性嚴。有法度。雖甚愛公。然教公。事事循蹈規矩。公。申國正獻公之長子。其父正獻公。時。平。生。家。に。居。る。言。寡。默。簡。重。嚴。ま。へ。て。事。物。に。つ。き。心。に。經。ず。申。國。君。も。其。性。質。に。よ。り。法。度。に。ま。べ。り。公。と。愛。し。ま。へ。ど。規。矩。を。た。か。へ。ず。の。正。と。道。を。甫。十。歲。祁。寒。

暑雨侍立終日。不命之坐。不敢坐也。
之。必冠帶。以見長者。平居雖甚熱。在
日。必冠帶。以見長者。平居雖甚熱。在
父母長者側。不得去巾襪。縛袴衣服。
唯謹。行步出入。無得入茶肆酒肆市
井里巷之語。鄭衛之音。未嘗一經於
耳。不正之書。非禮之色。未嘗一接於
目。
依て、呂樂公も、十歳ぐふより、邪寒暑氣の時
郎も、衣冠束帶をたゝし、父母長者の前は謹
坐し、安坐せし、仰かたれし坐せり、勿論巾
襪縛袴衣服と取の去るなり、行歩出入
み、酒肆茶肆にたらし、鄭衛といふ國に
淨瑠璃やりの音曲へ、耳に經つて、不正
非禮書物、又ハ色香に、

に接未^二未^二度^一
於助字

正獻公。諱州。通判。歐陽公。適州事。知州事。焦先生千之伯。
伯強。客文忠公所。嚴毅方正。正獻公
招延之。使教諸子。諸生小有過差。先
生端坐。召與相對。終日竟夕。不與之
語。諸生恐懼畏伏。先生方略降辭色。
時公方十餘歲。
父正獻公の諱州といへり
所に通判より、當時
大儒といふは、歐陽公より、あの國の知事
より、それ家に焦先生と名をたぐ之伯強といふ
學者寓客なり、この先生つゝに嚴重とたぐ、
作法方正く節毅とつゝ、父正獻公たぐく招

色と降時公
方に十餘歲

内人則正獻公

申國夫人與
教訓此の如之
嚴外則焦先
生の化導此の如
之篤あり故に公
徳器成就して大
人常言人生内
に嚴師友無
而能成と有
者いふ矣

延て諸の子弟の教授とてありて、
の衆中に、行義過差するを、
いふが前に、
もくれば、諸生いづれも、
畧く辭色と降げ、
則正獻公、
嚴外則焦先生化導如此之篤故公
徳器成就大異衆人公嘗言人生内
無賢父兄外無嚴師友而能有成者
少矣

右の如く、
外焦先生の篤く化導あり、
の徳器成就して、
に言やう人の生れ、
サつて徳器と成る

呂榮公張夫人待制諱品之之幼

女也最鍾愛然居常至微細事教之

必有法度如飲食之類飯羹許更益

魚肉不更進也時張公已爲待制河

北都轉運使矣

に張品之、
に鍾愛あり、
とて、
及夫人嫁呂氏夫人之母申

及夫人嫁呂氏夫人之母申

及夫人嫁呂氏夫人之母申

及夫人嫁呂氏夫人之母申

夫人呂氏に嫁に

及夫人嫁呂氏夫人之母申

及夫人嫁呂氏夫人之母申

唐陽城國子
司業と爲。諸
生と引て之に
告て曰凡學者

告之曰。凡學者。所以學爲忠與孝也。

忠と孝與と
爲と學所以
也諸生久親と
省と不者有乎
明日城に謁と
還養者二十輩
三年歸侍と不
者有之と

安定先生胡瑗
字翼之。隋唐
以來仕進文辭
尚之。而七經
業遺。苟くも
祿利に趨く

○安定先生胡瑗字翼之。患隋唐以來仕進尚文辭而遺經業。苟趨祿利。及爲蘇湖二州教授。嚴條約。以身先

思獲湖二州之
教授之為に及
て條約と嚴に
先づ大暑と雖
必ハ公服終日
諸生に見て師
弟子之禮と嚴
に解經要義
有に至て眼
て諸生の為
に其已とて
而て後人治
る所以の者
乎

之雖大暑必公服終日。以見諸生嚴
師弟子之禮。解經至有要義。愀然為
諸生言其所以治已而後治乎人者。
宋の胡瑗字翼之、大儒なり。安定先生と
稱。唐の代り官に仕進め、文辭となく
に作るとを尚て經學を遺やうとす。憂ふ
嚴く法度と約束し、我身と先へ嚴重にか
こむけ、大暑のちうみ、衣服冠をたし、師弟
子う禮と行ひ、經書の肝要なる所にうけ、眼
にうけ、人へうけ、身と治て、うけ、
人治とて、うけ、學徒千數、日月刮
磨、為文章皆傳經義、必以理勝、信其

に傳て、必其理の
勝、信、敦、行
實、尚、後、大
學、為、四方之
歸、庫舍客
能、不
其湖學に在
事、齊、置、經、義
齋者、疏、通、の
器局、有、者、と、置
て、之、に、居、治、事
齋者、人、に、治、事
一事、治、入、一
事、兼、民、治、兵、水、利、算
數、之、類、の、如、

庫舍不能容。師說敦尚行實。後為大學四方歸之。
依て文章、六經に傳て、義理と主、
文華といや、先生の師說と信向して行實と敦
尚、なり。後に大學校の官人、うけ、
四方の人、うけ、庫舍客、
湖學置經義齋。治事齋。經義齋者、擇
疏通有器局者居之。治事齋者、人各
治一事。又兼一事。如治民治兵水利
算數之類。其在大學亦然。其弟子散
在四方。隨其人賢愚。皆循循雅飭。其

言談舉止遇之不問可知爲先生弟
子其學者相語稱先生不問可知爲
胡公也曾て湖州にありて學校の内にて經義齋治事齋といふ公として六經の義
理に疏通一器局あり其の經義齋に居たり又
能一事を治一事と兼し其の治事齋に居
り又洪水とて田池にそとる地を爲に利する
と違ふもの又算數の術に達せしもの此治
事齋にありしもの大學校へて右のあり
たりその弟子四方に散りて皆に作
法雅勤よく賢愚をわけて隨ひてけり
門人ふに人と言談とせんもの舉止
先生の弟子なりと知るとや又學者
いふば胡公なりと知るとや

○明道先生言於朝曰。治天下以正風俗。得賢才爲本。宜先禮命近侍賢儒。及百執事。悉心推訪。有德業充備。足爲師表者。其次有篤志好學材良。行修者。延聘執遣。萃於京師。俾朝夕相與講明正學。先生朝廷奏一書。天下治。此所由也。の風俗と正くし。賢才ある人々を引擧ぐし。根柢を敦づ。のちまれ。ちれん。天子より近習の儒臣執事等へ。仰付られ。禮を以て。心と悉く。賢者と推尋。さて。人々に。志向の篤。材智行良。ある人々を。京師に萃て。朝夕に。講明と敦。遺し。招延をふく。京師に萃て。朝夕に。講明と敦。遺し。招延をふく。京師に萃て。朝夕に。講明と敦。遺し。招延をふく。

其道必本於人倫明
倫之本乎物理
明之明其教
小學之灑掃應對
對自其在其孝
信忠信之修禮
樂之周旋其
誘掖激勵漸摩
成就之如以之
道皆節序有其
要善擇身之
修天下之修成
自至在鄉人
之道至其
學行皆是中
者之成德為
標識明達

學問の正と講義
て明ふふと
其道必本於人倫明
乎物理其教自小學灑掃應對以往
脩其孝悌忠信周旋禮樂其所以誘
掖激勵漸摩成就之道皆有節序其
要在於擇善修身至於化成天下自
鄉人而可至於聖人之道其學行皆
中於是者為成德取材識明達可進
於善者使日受其業擇其學明德尊
者為大學之師次以分教天下之學

善に進可者
取之目其業
受其學明
德之者擇
大學之師
使次以分教
天下之學
分教人

親義別序信の倫に本づき諸物の理を明ふこと
誘掖激勵漸摩成就之第一として、その節序を
識明達て又ハ德尊學問あさうなるものと擇て
業を授けさせ、善なり大學校の師範とすべし
これに次ぐもの都と分つる、天下國々學校に置べし

士人學縣升之州
州賓興於大學
學聚而教之
歲論其賢者能者
於
朝凡選士之法
皆以性行端潔
居家
孝悌有廉耻
禮讓通明學業
曉達治
道者

擇士人學縣升之州州賓興於大學
大學聚而教之歲論其賢者能者於
朝凡選士之法皆以性行端潔居家
孝悌有廉耻禮讓通明學業曉達治
道者

齋といふは徳ありと質密とてさへ一へ教師
といふは徳人の法とてさへとてさへ一へ教師
の人のまじり學校の光と觀とふは禮義とてさへ
管絃の音とききし聖賢の儀と仰し如是の
法と數十條先生

藍田呂氏郷約
約に曰凡同約
の者徳業相勸
過失相規禮
俗相交患難
相恤善行有
則者籍に書
有若約に違
者亦之と書
三犯て而て罰
之行悛て不
悛者絶之

藍田呂氏郷約曰凡同約者徳業
相勸過失相規禮俗相交患難相恤
有善則書于籍有過若違約者亦書
之三犯而行罰不悛者絶之

明道先生人
教之知と致自
止と知に至意
と誠にすより天
と平にするに至り
灑掃應對より理
と窮性と盡す
至すて循循とて
有序と捨而て遠
に趨下と處而
て高と闊所
輕く自大と
て而て平に
得し無と病也

明道先生教人自致知至於知止
誠意至於平天下灑掃應對至於窮
理盡性循循有序病世之學者捨近
而趨遠處下而闊高所以輕自大而
卒無得也

見辭に處て、高場と聞ふものあり、やうたものは
自輕薄に高くて、卒に道德を得て、先んず
これと病て、右の
あやうなり

右實立教

江革少失父。獨與母居。遭天下亂。盜
賊並起。革負母逃難。備經險阻。常採
拾以爲養。數遇賊。或劫欲將去。革輒
涕泣求哀。言有老母。辭氣慙款。有足
感動人者。賊以是不忍犯之。或乃指
避兵之方。遂得俱全於難。

言辭氣慙款。有足感動人者。賊以是不忍犯之。或乃指
避兵之方。遂得俱全於難。漢の世に江
革といふ人有る。少くして父を失ひ、母と
共に居て、天下の亂れ、盜賊並に起り、
革は母を負ひて難を避る。常々採拾して
以て母を養ふ。數回賊に遇ふ。或は劫
して去るを欲す。革は涕泣して哀を求
め、老母を有るを言ふ。辭氣慙款、有
るに足る。賊は之を以て犯さず。或は乃
ち避兵の方を指し、遂に俱全に難を
得る。

供母便身之物莫不畢給

下邳に轉客して貧窮裸跣。行傭以母に
供。身に便する之物畢く給ふ。

薛包好學篤行。父娶後妻而憎包。

薛包學を好みて篤行に篤む。父は後妻を娶て包を憎む。分出之。包は日夜號泣。不能去。至被毆。

數之之譜是に
 由て愛と父に失
 下。祥愈恭謹。父母有疾。衣不解帶。湯
 藥必親嘗。母嘗欲生魚。時天寒水凍。
 祥解衣將剖水求之。水忽自解。雙鯉
 躍出。持之而歸。母又思黃雀。冬復有
 雀數十飛入其幕。復以供母。鄉里驚
 嘆。以為孝感所致。有丹柰結實。母命
 守之。每風雨。祥輒抱樹而泣。其篤孝
 純至如此。

數譜之由是失愛於父。每使掃除牛
 下。祥愈恭謹。父母有疾。衣不解帶。湯
 藥必親嘗。母嘗欲生魚。時天寒水凍。
 祥解衣將剖水求之。水忽自解。雙鯉
 躍出。持之而歸。母又思黃雀。冬復有
 雀數十飛入其幕。復以供母。鄉里驚
 嘆。以為孝感所致。有丹柰結實。母命
 守之。每風雨。祥輒抱樹而泣。其篤孝
 純至如此。

里驚嘆。以為
 為孝感所致。
 丹柰有實。母
 結實。母命守
 之。每風雨。祥
 輒抱樹而泣。其
 篤孝純至此。

○王褒字偉元。父儀為魏安東將軍。
 司馬昭司馬東關之敗。昭問於衆曰。
 近日之事。誰任其咎。儀對曰。責在元

儀對曰曰責元帥在昭怒

帥昭怒曰司馬欲委罪於孤耶遂引

哀父之非命

哀痛父非命於是隱居

痛是於隱居

教授三徵七辟皆不就廬于墓側且

七辟皆不就

夕常至墓所拜跪攀栢悲號涕淚著

夕常至墓所

樹樹為之枯讀詩至哀哀父母生我

至拜跪攀栢

劬勞未嘗不三復流涕門人受業者

攀栢悲號

並廢蓼莪之篇

樹之為枯

父母我之生也

劬勞未嘗不

度身而蠶或有密助之者哀皆不聽

夕常至墓所

及司馬氏篡魏哀終身未嘗西向而

七辟皆不就

坐以示不臣于晉

夕常至墓所

度身而蠶或有密助之者哀皆不聽

夕常至墓所

及司馬氏篡魏哀終身未嘗西向而

夕常至墓所

坐以示不臣于晉

夕常至墓所

度身而蠶或有密助之者哀皆不聽

夕常至墓所

及司馬氏篡魏哀終身未嘗西向而

晉の西河の人王延親に事て色養す夏則枕席と扇冬則以身温被隆冬盛寒體常無全衣而親極滋味

柳玘曰崔山南昆弟子孫之盛鄉族罕比山南曾祖王母長孫夫人年高無齒祖母唐夫人事姑孝每旦櫛

母唐夫人姑に事て孝且毎に櫛を櫛し階下に侍し即ち堂に升て其姑に乳す長孫夫人粒食セ不み數年而康寧なり

一日疾病なり長幼咸華宣言無以報新婦恩願婦の恩を報ず無願へ新婦子有孫有子皆得如新婦孝敬則崔之門安得不昌大乎

坐せざるなり晋の代と云ふは西の方にあつたやう

○晉西河人王延事親色養夏則扇枕席冬則以身温被隆冬盛寒體常無全衣而親極滋味王延親に孝やう人無く顔色と云ふは體に全き衣服と云ふは心と云ふは親に全き心と云ふは後世に家富むるに云ふは親に全き心と云ふは

○柳玘曰崔山南昆弟子孫之盛鄉族罕比山南曾祖王母長孫夫人年高無齒祖母唐夫人事姑孝每旦櫛

夫人不粒食數年而康寧人山南昆弟子孫之盛鄉族罕比山南曾祖王母長孫夫人年高無齒祖母唐夫人事姑孝每旦櫛

病長幼咸華宣言無以報新婦恩願新婦有子有孫皆得如新婦孝敬則崔之門安得不昌大乎

婦の我に事ごとくなりせば
崔氏安う大昌ちきく命となり

○南齊庾黔婁爲尋陵令到縣未旬

父易在家テ遭疾フ。黔婁忽心驚キ舉身流

汗ヲ即日棄官歸家家人悉驚其忽至

南齊（なんせい）の代に、庾黔（よひけん）晏（えん）と王人（わうじん）屏陵（へいりやう）といふ所の
人となりたるふ、行て一旬（ひととせ）ぞとふるふ、父の庾易

家にあり疾をこねり、まうふ黔婁に驚いたれば
官と廢いふと家に歸り、家人とてみせしむるなり

時易疾始二日。醫云欲知差劇。但堂

糞甜苦ヲ易泄利黔婁輒取テ薑之味轉

甜滑。心愈憂苦。至夕每稽顙北辰求

以身代至時父の疾二日めなりと。医者いふやうに
差々劇々を知らふハ糞と嘗く又ふめなり

古ハ 齋さいベリ 甜あまハ 疾はや敷敷ブとと 大おほ便べん壯さう利り々々ハ
 無妻むさい されと 嘗あじ々々に 味の 甜あまーいと 憂うれ苦くて され

りたる北辰（いづて）稽顙（しきん）
 才代（さいだい）のころにけりとお

海虞令何子平母喪去官哀毀踰

每哭踊頓絕方蘇鶴人明末東

蠲荒繼以師旅八年不得寧升晝夜

號哭常如祖。極之。冬令衣絮夏不

秘清涼一日以米數合爲粥小進鹽

果所居屋敗不蔽風日兄子伯興欲

小學卷之八

一

號哭（一）常（二）祖（三）括（四）之（五）日（六）の如（七）矢（八）の
 繁（九）と衣（十）不（十一）夏（十二）の
 清涼（十三）に就（十四）不（十五）一（十六）
 日に米數（十七）合（十八）と以（十九）
 粥（二十）に為（二十一）盛（二十二）米（二十三）と
 進（二十四）不（二十五）居（二十六）所（二十七）屋（二十八）敗（二十九）
 て風日（三十）に蔽（三十一）不（三十二）兄（三十三）
 の子（三十四）伯興（三十五）為（三十六）草（三十七）
 理（三十八）を（三十九）欲（四十）ふ（四十一）平（四十二）
 肯（四十三）不（四十四）曰（四十五）我情（四十六）
 事未（四十七）申（四十八）未（四十九）天地（五十）
 の一罪人耳（五十一）屋（五十二）
 何（五十三）官（五十四）覆（五十五）宜（五十六）けん
 未（五十七）宜（五十八）二度（五十九）
 蔡興宗（六十）會稽（六十一）太守（六十二）其（六十三）加（六十四）祿（六十五）賞（六十六）為（六十七）營（六十八）塚（六十九）塋（七十）

為（一）葺（二）理（三）子平（四）不肯（五）曰（六）我情（七）事未（八）申（九）天
 地一罪人耳屋何宜覆（十）何（十一）子平（十二）ハ母（十三）の喪（十四）
 哭（十五）踊（十六）へ（十七）る（十八）べ（十九）い（二十）と（二十一）た（二十二）え（二十三）る（二十四）蘇（二十五）生（二十六）す（二十七）る（二十八）か（二十九）ら（三十）ふ（三十一）大明
 年中（三十二）に東（三十三）七（三十四）饑饉（三十五）を（三十六）い（三十七）ふ（三十八）れ（三十九）し（四十）と（四十一）も（四十二）う（四十三）く（四十四）師
 旅（四十五）つ（四十六）と（四十七）繼（四十八）て（四十九）八（五十）年（五十一）を（五十二）あ（五十三）い（五十四）ど（五十五）葬（五十六）禮（五十七）と（五十八）い（五十九）ふ（六十）と（六十一）あ（六十二）や（六十三）晝
 夜（六十四）號（六十五）哭（六十六）て（六十七）喪（六十八）ふ（六十九）あ（七十）い（七十一）初（七十二）の（七十三）ぐ（七十四）く（七十五）なり（七十六）と（七十七）喪（七十八）の（七十九）初（八十）の（八十一）
 祖（八十二）姑（八十三）髪（八十四）す（八十五）る（八十六）の（八十七）禮（八十八）儀（八十九）あり（九十）冬（九十一）に（九十二）懸（九十三）臘（九十四）と（九十五）い（九十六）ふ（九十七）と（九十八）あ（九十九）や（一百）晝
 京（一百一）に（一百二）あ（一百三）い（一百四）ふ（一百五）一（一百六）日（一百七）に（一百八）粥（一百九）す（二百）る（二百一）は（二百二）ら（二百三）と（二百四）食（二百五）し（二百六）る（二百七）雨（二百八）風
 り（二百九）鹽（三百）と（三百一）な（三百二）り（三百三）ず（三百四）野菜（三百五）と（三百六）食（三百七）せ（三百八）ず（三百九）屋（四百）や（四百一）れ（四百二）雨（四百三）風
 も（四百四）蔽（四百五）さ（四百六）り（四百七）し（四百八）る（四百九）バ（五百）兄（五百一）子（五百二）の（五百三）伯興（五百四）と（五百五）い（五百六）ふ（五百七）に（五百八）葺（五百九）理（六百）え（六百一）
 ん（六百二）と（六百三）い（六百四）ふ（六百五）子（六百六）平（六百七）が（六百八）く（六百九）肯（七百）不（七百一）て（七百二）い（七百三）ふ（七百四）と（七百五）い（七百六）ふ（七百七）子（七百八）の（七百九）
 肯（七百十）不（七百十一）曰（七百十二）我情（七百十三）事未（七百十四）申（七百十五）未（七百十六）天地（七百十七）の（七百十八）一罪人（七百十九）耳（七百二十）屋（七百二十一）
 何（七百二十二）官（七百二十三）覆（七百二十四）宜（七百二十五）けん（七百二十六）未（七百二十七）宜（七百二十八）二度（七百二十九）蔡興（七百三十）
 宗（七百三十一）為（七百三十二）會稽（七百三十三）太守（七百三十四）其（七百三十五）加（七百三十六）祿（七百三十七）賞（七百三十八）為（七百三十九）營（七百四十）塚（七百四十一）塋（七百四十二）

為（一）に塚（二）塋（三）と（四）
 朱壽昌（五）生（六）て七（七）
 歳（八）の父（九）雍（十）に
 生（十一）ず其母（十二）劉氏（十三）
 と出（十四）て民間（十五）に嫁（十六）
 す母子（十七）相（十八）知（十九）不（二十）者
 五十年（二十一）壽昌（二十二）四
 方（二十三）に（二十四）行（二十五）之（二十六）と求（二十七）
 て已（二十八）不（二十九）飲（三十）食（三十一）酒（三十二）
 肉（三十三）と御（三十四）酒（三十五）罕（三十六）
 人（三十七）興（三十八）言（三十九）て
 輒（四十）泣（四十一）と流（四十二）
 熙寧（四十三）初（四十四）官（四十五）と
 乘（四十六）秦（四十七）興（四十八）家人（四十九）訣（五十）誓（五十一）不（五十二）見（五十三）母（五十四）不（五十五）復（五十六）還（五十七）
 與（五十八）訣（五十九）に誓（六十）母（六十一）に
 見（六十二）不（六十三）復（六十四）還（六十五）不（六十六）
 行（六十七）て同州（六十八）に次（六十九）て
 經（七十）由（七十一）余（七十二）市（七十三）

朱壽昌（一）生（二）七歳（三）父（四）守雍（五）出（六）其母（七）劉
 氏（八）嫁（九）民間（十）母子（十一）不（十二）相（十三）知（十四）者（十五）五十年（十六）壽
 昌（十七）行（十八）四方（十九）求（二十）之（二十一）不（二十二）已（二十三）飲（二十四）食（二十五）罕（二十六）御（二十七）酒（二十八）肉（二十九）
 與人（三十）言（三十一）輒（三十二）流（三十三）涕（三十四）宋（三十五）の壽昌（三十六）生（三十七）て七歳（三十八）
 妻（三十九）の（四十）み（四十一）と（四十二）い（四十三）ふ（四十四）壽昌（四十五）が（四十六）母（四十七）ハ（四十八）逐（四十九）出（五十）と（五十一）民間（五十二）に
 嫁（五十三）けり（五十四）五十年（五十五）を（五十六）い（五十七）ふ（五十八）母子（五十九）相（六十）知（六十一）不（六十二）る（六十三）は（六十四）い（六十五）ふ（六十六）と（六十七）い（六十八）ふ（六十九）母（七十）と（七十一）四（七十二）方（七十三）に（七十四）求（七十五）て（七十六）や（七十七）す（七十八）酒（七十九）肉（八十）も（八十一）熙寧（八十二）初（八十三）棄
 官（八十四）入（八十五）秦（八十六）興（八十七）家人（八十八）訣（八十九）誓（九十）不（九十一）見（九十二）母（九十三）不（九十四）復（九十五）還（九十六）
 行（九十七）次（九十八）同州（九十九）得（一百）焉（一百一）劉氏（一百二）時（一百三）年（一百四）七十（一百五）餘（一百六）矣（一百七）

得_レり。劉氏時に
年七十餘。雍の
守錢明逸。事と
以_レ聞。壽昌に
詔_レりて還_レる官に
就_レは是に歸て天
下皆其孝と知
焉_〇矣

壽昌再_レ郡守
府に通判_レる。其
同母の弟妹と迎
て人歸_レ居と數
年。其母卒す。涕
泣_レて幾明と喪
す。其弟妹と

附_レて益_レ篤。爲_レに
田宅と買_レて人
居_レ其宗族に於_レる
尤も恩意と盡_レす。
兄弟之孤女二人
と嫁す。其葬し
能_レ不_レ者と葬_レす。
十餘喪。蓋_レ其天
性此の如_レ。

伊川先生の家
喪と治_レに浮屠
と用_レ不_レ及_レる在_レり
と亦_レ一二人の
家之に化_レする有_レり
霍光_〇禁_レ闔_レ二十餘年
出入_レ禁_レ闔_レ二十餘年
出入_レ禁_レ闔_レ二十餘年
出入_レ禁_レ闔_レ二十餘年

雍守錢明逸以事聞。詔壽昌還就官。
繇是天下皆知其孝。

七十餘。家人に訣_レる。其母に就_レは是に歸て天下皆其孝と知焉_〇矣。太守錢明逸。事と以_レ聞。壽昌に詔_レりて還_レる官に就_レは是に歸て天下皆其孝と知焉_〇矣。壽昌再_レ郡守。府に通判_レる。其同母の弟妹と迎て人歸_レ居と數年。其母卒す。涕泣_レて幾明と喪す。其弟妹と附_レて益_レ篤。爲_レに田宅と買_レて人居_レ其宗族に於_レる。尤も恩意と盡_レす。兄弟之孤女二人と嫁す。其葬し能_レ不_レ者と葬_レす。十餘喪。蓋_レ其天性此の如_レ。

者十餘喪。蓋其天性如此。
に河中の太守の代役とせられ、依て母の弟妹とほれり。多り、そのうちに母すきなり。あまりの泣に明と喪きんとす。ける、依て弟妹と折撫あや殊にけり。りり、田宅と買_レて宗族と恩惠す。兄弟の子に孤女二人あり。ととり、嫁にけり。又葬禮のつとまらる。公葬禮いふも多し。天性、せんにくの。

伊川先生家治喪不用浮屠在洛
亦有一二人家化之
霍光出入禁闔二十餘年。小心謹

未嘗過有未
審者。出入每
殿門。進止
常處有。即僕射
竊識視
視に尺寸と失
不(未)二渡

汲黯景帝の時
太子洗馬と為嚴
武帝位に即て
為主爵都尉
為數直
諫不得久居位
是時太后弟武安侯田
蚡丞相為中二千石
拜謁蚡弗為
禮。黯見蚡。未嘗拜揖之。
漢の汲黯ハ太
子の洗馬の役
を充てしめられ
武帝の即位に
從ひて主爵都尉
に任ぜられ、數
直に召され、諫
言を述べ、久
く居る位に
得ず。是時太后
の弟武安侯田
蚡が丞相として
中二千石を拜
し、謁するに
蚡は之を拜し
揖せず。

上方に文學の
儒者を招上り曰
吾云云と欲す
黯對て曰陛下
内欲多て而
外仁義を施す
奈何。唐虞之
治に效んず欲
乎。上感色と變
て

上方に文學の
儒者を招上り曰
吾云云と欲す
黯對て曰陛下
内欲多て而
外仁義を施す
奈何。唐虞之
治に效んず欲
乎。上感色と變
て

慎未嘗有過為人沈靜詳審每出入
下殿門進止有常處即僕射竊識視
之不失尺寸霍光禁闥出入寸不可失
即僕射のもしなす所のにめま一つあて
視に尺寸のちひなかりとせり

汲黯景帝時為太子洗馬以嚴見
憚武帝即位召為主爵都尉以數直
諫不得久居位是時太后弟武安侯
田蚡為丞相中二千石拜謁蚡弗為

禮。黯見蚡。未嘗拜揖之。
漢の汲黯ハ太
子の洗馬の役
を充てしめられ
武帝の即位に
從ひて主爵都尉
に任ぜられ、數
直に召され、諫
言を述べ、久
く居る位に
得ず。是時太后
の弟武安侯田
蚡が丞相として
中二千石を拜
し、謁するに
蚡は之を拜し
揖せず。

上方招文學儒者上曰吾
欲云云黯對曰陛下内多欲而外施
仁義奈何欲效唐虞之治乎上怒變
色而罷朝公卿皆為黯懼上退謂人
曰甚矣汲黯之戇也羣臣或數黯黯

大將軍青侍中
 侍上。上厠に
 踞して之に視
 相弘宴見す。上
 或時ハ冠を不
 に見が如く至てハ
 冠を不バ見不也
 上嘗武帳に坐
 黯前で事
 奏。上冠を不
 黯と望見て帷中
 に避入ると其奏
 と可ト使其敬
 禮ヲ見此
 如

大將軍青侍中。上厠
 視之。丞相弘宴見。上或時不冠。至如
 見黯不冠不見也。上嘗坐武帳。黯前
 奏事。上不冠。望見黯。避帷中。使人可
 其奏。其見敬禮如此。
一ツタテハ大將軍の衛青とシテハ厠傍に夷踞
 つく視と云ハ丞相の公孫弘と云ハ宴居と云ハ
 思ハスハ汲黯やうき人トシテハあハタマらずハ
 武具間の帳中に居ると云ハ汲黯と云ハ
 事と奏聞と云ハ上冠と云ハ黯と云ハ
 帷のうらハ避入人ト云ハ奏聞のきりて可
 敬禮ト云ハと云ハ

初魏の遼東
 公翟黑子太武
 に寵有。使と
 并州に奉て布
 千匹と受事覺
 黑子著作郎高
 弘に謀。曰主
 我に問。當に
 實と以告當
 為に當之と諱當
 之。曰公ハ帷帳
 の寵臣。罪有
 首實。或ハ原
 罪。或ハ重欺
 罪。為可ト不也
 中書侍郎崔鑒

○初魏遼東公翟黑子有寵於太武
 奉使并州受布千匹事覺黑子謀於
 著作郎高弘曰主上問我當以實告
 為當諱之弘曰公帷帳寵臣有罪首
 實庶或見原不可重為欺罔也中書
 侍郎崔鑒公孫質曰若首實罪不可
 測不如姑諱之黑子怨弘曰君奈何
 誘人就死地入見帝不以實對帝怒

公孫實曰若實
實セバ罪測可
不如此姑之
と識る黒子
死んで日暮奈何
て人々を誘て死
地に就む入て帝
に見て實と以て
對不帝怒て之
と殺す當二漢

帝允て太子
に經を授使崔
浩史の事と以て
收被に及で人
子允に謂て

入て至尊に思
吾自卿と導る
脱至尊問有バ
但吾語に依

太子帝に思て
言高允心と
小て慎密なり
且微賤なり制
崔浩に由請其
死と帝允と
引で問て曰國
書皆浩が爲所
平對て曰臣浩

授之

初ハ文章の所へありて魏の太武帝の寵愛
東の公崔黒子といふ國へ使と奉りて黒子
あつた余剛といふ國へ使と奉りて黒子
いふ布千匹と納けしその事覺ると黒子
著作郎高允に相謀てつやう主上を我に問
る實を以て告ぐや又諱べしや高允と
ハ公は惟唯の寵愛し人臣たり罪
ら首實するべし原するありなん重主上と
欺問するべし崔鑒と公孫實と
諱するべしなり依て黒子高允と謀りて
君奈何して人を死地に就しつやうや
帝に思ひて實事を以て對る帝使允
帝いふ遂にありたふなり

授太子經及崔浩以史事被收太子

謂允曰入見至尊吾自導卿脱至尊

有問但依吾語

崔浩といふ史記とほつと魏の國の事
とあるける善惡のあつたれ悪かれの奏
聞る史官の邪意つととあつた崔浩はらう
う高允といふあつたり太子あつた
高允にありつたり至尊といふ五語に卿の
のあつと導せんやと問あつと五語ふさういふ

太子見帝言高允小心慎密且

微賤制由崔浩請赦其死帝召允問

曰國書皆浩所爲乎對曰臣與浩共

爲之然浩所領事多總裁而已至於

著述臣多於浩帝怒曰允罪甚於浩

與共に之と為り
然るに浩を領する
所の事多し總裁
而已著述に至
て臣浩より多
帝怒て曰んハ
罪浩より甚し
何と以て生ずと
得太子懼て曰
天威嚴重なり
先小臣迷亂
次と失耳臣歸
に問皆云浩
為所於

帝允に問信に
東宮の言所の
如平對て曰く

臣が罪當に族
と滅さる當敢
妄せ不殿下臣
侍講日久き
以臣と哀て其
生と巧く欲耳
實ハ臣に問不
臣亦此言無
敢迷亂せ不帝
願て太子
謂て曰直なる
哉是人情の
難する所なり
而允能之と
為死に臨て辭
と易不ハ信也
臣が為君と欺
う不ハ貞也宜

何以得生太子懼曰天威嚴重允小
臣迷亂失次耳臣歸問皆云浩所為

太子奏し帝にあらせりハ高允
ハ心と小て慎密なりそのハ微賤の宮
うのの制ハ崔浩より死罪と赦た
ハ崔浩と臣より崔浩の為ヤハ高允
の總裁より著述ハ崔浩より臣
多より崔浩より崔浩より崔浩より
太子威光の嚴重にやせよハ小宮人の高
允にハ崔浩の迷て言の次第と崔浩
臣より崔浩より崔浩より崔浩より
帝問允信

如東宮所言乎對曰臣罪當滅族不
敢虛妄殿下以臣侍講日久哀臣欲
巧其生耳實不問臣臣亦無此言不
敢迷亂帝顧謂太子曰直哉此人情
所難而允能為之臨死不易辭信也
為臣不欺君貞也宜特除其罪以旌
之遂赦之

帝又高允に問たす實に東宮の
言の通りやハ高允より崔浩の
や臣があれと崔浩の罪ハ崔浩の
崔浩の罪ハ崔浩の罪ハ崔浩の
侯臣より太子の殿下に侍講と
あがハ太子臣と哀と崔浩の生と巧

特に其罪を
除て以之と旌
宜遂に之と赦
當宜に渡す

他日太子允と
議曰く吾卿が
為に死と脱と
んと欲す而も
卿從ふ不ハ何
也元曰臣崔
浩與實に史の
事と同一死生
榮辱義獨殊
殿下再造之

慈と尚心に違
臣が願に非
也太子容と動
て稱歎すハ
退て人に謂て
曰我東宮の指
導と奉不者崔
黒子に負と恐
故也

李君行先生
名ハ潛度州の
人京師に入
酒州に至
留止す其子弟
先往て請君行

まふくくり實ハ臣に一件と問ふに臣
なふくくり詩にさうく決して心ふん迷ふ
と帝られんきうり太子と顧眷の宣ハ誠
に正直なるものこ下で人情のこ難
まうく高允能為かき人只今死するに臨ても
辭と易さるハ信かり主君と歎くさハ貞さ
罪と除て名と旌すド
うて遂に赦さる

他日太子讓允
曰吾欲為卿脱死而卿不從何也允
曰臣與崔浩實同史事死生榮辱義
無獨殊誠荷殿下再造之慈違心苟
免非臣所願也太子動容稱歎允退
謂人曰我不奉東宮指導者恐負崔

黒子故也
他日太子高允と議
ハ何ゆゑや臣崔浩と史記に同
たりまうれば生死も榮辱も下出る殊
慈愛ハ荷ひたし心違てははくを以て免
動容て稱歎する高允これより退
ふりけるハ故あれは東宮の指導
とあはれて死と恐るるハ誠ハ以前崔黒子
に負て詞に負すことなりハ故なり

○李君行先生名潛度州人入京師
至泗州留止其子弟請先往君行問
其故曰科場近欲先至京師貫開封

其故問曰科
場近先京師に
至開封の戸籍
に貫つ應と取
欲

君行許不
日汝度州の人
而に開封の戸籍
に貫つ君に事
を求む欲
而先君と欺可
ずん平寧進緩
數年すも行可
う不也

崔玄暉母盧氏
氏嘗玄暉に誠

曰く。高姨兄也
田郎中辛亥玄
取に見て日。兄
子官に従者人
有來て云貧乏
つて存するあ
能不。此是好消
息貴貨充足衣
馬輕肥云云
聞若く此惡
消息と吾嘗て
以て確論と為
比親表中の
仕宦者者と見
に錢物と將て
其父母に上つれ
父母但喜悅する

戸籍取應

宋の李君行先生京師にありて

にその子弟のれども先はる行へて
の故を問れば京師の器量の科とありて仕
官に引擧ぐらる科場の日らう、三つは
や開封府の城下へいり、その地の仕居戸
籍にのせられ居て命
君行不許曰汝度州

人而貫開封戸籍欲求事君而先欺

君可乎寧進緩數年不可行也

曰汝度州の人ありて他の人數が籍に
貫居る欺詐なり仕官を求む先君と欺偽と
修行するも云々となり學者はかくのうを
數年と

崔玄暉母盧氏嘗誠玄暉曰吾見

姨兄也田郎中辛亥取曰兄子從官

者有人來云貧乏不能存此是好消

息若聞貴貨充足衣馬輕肥此惡消

息吾嘗以為確論

崔玄暉と云ふ人の母に
盧氏と云ふ人の子の

玄暉にいまめはあは、姨兄の玄取
兄子の仕官に宜しうある方が、人さう
子の消息と云ふは、官貧乏と云ふ存、こつ
うくう、好消息なり、おろかる、た、さう

貴貨充足なり衣服馬具輕肥云云、
惡消息なり、云々、吾つに確論と云ふ

比見親表中仕宦者將錢物上其父

母父母但知喜悅竟不問此物從何

伊川先生の
曰。安定之門人
往往古と誓ふ
民と愛ふと知
則ち政と爲に
於何有(安也)

○伊川先生曰。安定之門人往往知
誓古愛民矣。則於爲政也何有。
伊川先生の門人ハ往往古昔聖王の事と誓ふ。安定先生の門人ハ往往古昔聖王の事と誓ふ。民と愛ふと知。則ち政と爲に於何有。

呂榮公自少官守處未嘗千人舉
官守の處未嘗
千人の舉薦
干未其子舜從
官と會誓に守
人其知ると求
從對て日職事
勤其他也
慎人其知ると求

○呂榮公自少官守處未嘗千人舉
薦其子舜從守官會誓人或議其不
求知者舜從對曰勤於職事其他不
敢不慎乃所以求知也。
呂榮公自少官守處未嘗千人の舉薦其子舜從守官會誓人或議其不求知者舜從對曰勤於職事其他不敢不慎乃所以求知也。

乃ち知ん
求る所以也
未廣

と求るなり可なり安定
職分と勤と其
慎人其知ると求るの道なり徳
う人其知ると求るの道なり徳

小學卷之八終

